参考文献

愛知考古学談話会　1988『＜条痕文土器＞文化をめぐる諸問題－縄文から弥生－』資料Ⅱ・研究編

大橋　康二　1989『肥前陶磁』考古学ライブラリー55　ニューサイエンス社

鈴木次郎他　1990『宮ヶ瀬遺跡群Ⅰ　上村遺跡　半原向原遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告21　神奈川県立埋蔵文化財センター

瀬戸市史編纂委員会　1998『瀬戸市史陶磁史編』六

谷口　肇　1994「縄文時代晩期終末～弥生時代初頭」『宮ヶ瀬遺跡群Ⅳ』かながわ考古学財団調査報告21　財団法人　かながわ考古学財団

1996「縄文時代晩期終末～弥生時代初頭」『宮ヶ瀬遺跡群Ⅶ』かながわ考古学財団調査報告９　財団法人　かながわ考古学財団

1997「縄文時代晩期終末～弥生時代初頭」『中里遺跡（No.31)』かながわ考古学財団調査報告30　財団法人　かながわ考古学財団

近野正幸他　1996『宮ヶ瀬遺跡群Ⅷ』かながわ考古学財団調査報告10　財団法人かながわ考古学財団

三木　弘他　1992『東京都新宿区　内藤町遺跡』東京都建設局・新宿区内藤町遺跡調会

吉田　格　1958「神奈川県中屋敷遺跡―所謂土偶形容器発掘遺跡の考察」『銅鐸』14　立正大学考古学会

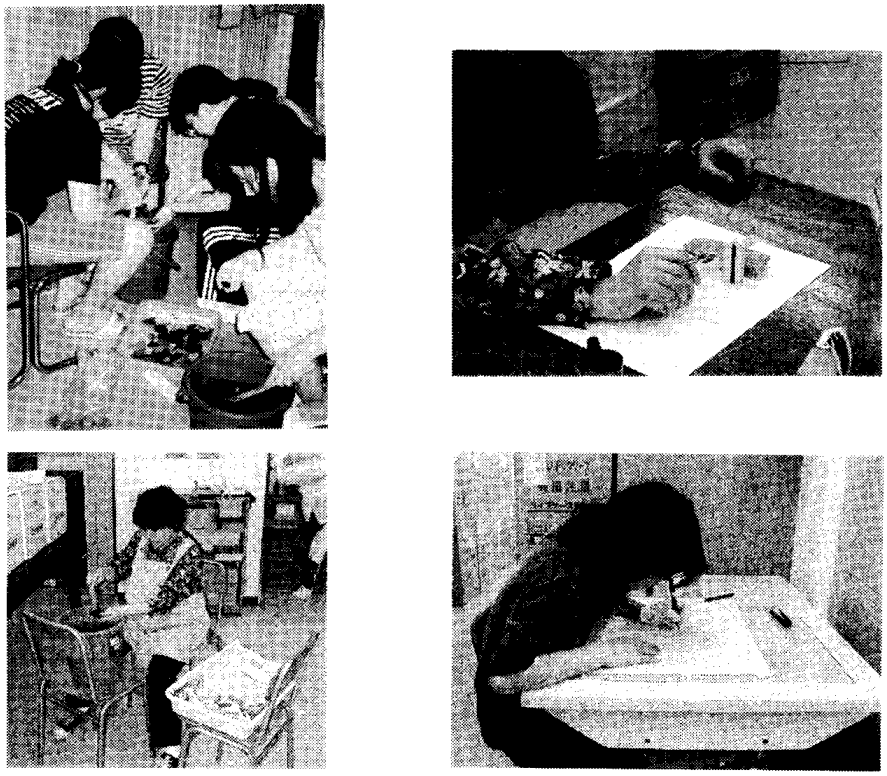


写真12　整理作業風景

1トレ3号土坑で出土した東海系の樫王式の系統とみられるレンズ状に押捺が加えられた突帯をもつ土器など。

また出土数が少ないために今回分類に入れなかったが、諸磯b～c式がTP5の1層から1点、7層から1点、2トレ1層から1点の計3点確認されている。分類群の割合は、5群の条痕文を施された甕形土器がもっとも多く占める。4～6群については、1・2次の調査で当該期の土器が検出する土坑を検出することができた(1～3号土坑)。

石器の素材については、出土した石器27点の内、24点の石材は黒曜石であった。石材産地分析を行っていないため産地は不明であるが、肉眼観察では、異なる特徴を有するものが存在することから、複数の産地及び遠隔地から搬入された石材を利用している可能性も考えられる。一方、打製石斧の石材は、酒匂川などの河川で採取できる在地の硬質細粒凝灰岩粒が用いられている。

陶磁器については、18世紀後半以降の製品を中心として、17世紀代から19世紀代にかけてのものが認められた。陶器と磁器の割合は、ほぼ同量である。器種としては、磁器の碗が比較的多く認められるように、日常的な雑器でほぼ占められている。産地としては、肥前、瀬戸・美濃、明石・堺の製品がある。火鉢や灯明皿など火と関連するものは、瀬戸・美濃系の陶器が主体である。18世紀中頃まで、国内の磁器市場は肥前系磁器がほぼ独占した状態であった。18世紀の後半になって各地に磁器窯が興り、日常雑器としての碗などが大量に生産され、全国に供給されるようになる。中屋敷遺跡の陶磁器類が18世紀後半以降の製品を主体としているのも、このような生産地の増加及び供給地の拡大という流れと大きく関わっていることが考えられる。

このように中屋敷遺跡では、縄文時代早期後半、前期後半、前期末葉～中期初頭、中期後半、晩期末葉～弥生初期、前期末葉～中期初頭、17世紀から19世紀代の遺物を確認することができた。

今後の課題として、これら遺物の空間的な分布、また集落との関係を含め総合的に捉えていきたい。　(佐々木、舘)

註

1　土器については、新井達哉氏、阿部泰之氏、井上　賢氏、谷口　肇氏、陶磁器については市川正史氏、木村吉行氏、石器・石製品については吉田政行氏に御教示いただいた。

2　谷口　肇　1997「(5)出土遺物」『宮畑遺跡　矢頭遺跡　大久保遺跡』かながわ考古学財団調査報告25　財団法人かながわ考古学財団　p.290

3　昨年度の層序については、今年度の基本土層に対応する層に読み替えた。

重量120.9g。2トレ5層出土。　（舘）

4　石製品（図10、写真10）

石製品は調査区内から2点出土した。

1　粘板岩製の砥石である。2面に加工痕が認められる。残存長1.6cm、幅2.9cm、残存厚0.5cm、重量3.5g。1トレ1層出土。

2　チャートもしくは石英質石材の火打ち石であろう。左右の両辺と下辺に微細剥離痕が認められ、火打ち石として使用された際に残されたものと考えられる。長さ1.4cm、幅2.0cm、厚さ0.9cm、重量3.1g。TP5－1層出土。　（舘）

5　土製品（図11、写真11）

土製品は調査区内から1点のみ出土した。

1　土製の人形である。右半分が欠損している。長さ2.9cm、残存幅1.4cm、厚さ1.3cm、重量3.9g。2トレ1層出土。　（舘）

6　まとめ

第2次調査で出土した遺物の成果を以下にまとめる。

土器については、第1次調査では確認されなかった縄文時代前期後半、中期後半の土器片が新たに確認された。また1トレと2トレにおいて、弥生時代に比定される資料がまとまって出土した。中屋敷遺跡出土土器は、第1次調査の成果をあわせると、比定時期をもとに1～6の分類が可能であると考えられる。仮に1～6群と呼称し、以下にその分類案を示す。

1群　縄文時代早期後半に比定される土器群

TP2の7層[3]、TP5・2トレ5～7層で出土した野島式に比定される一群

2群　縄文時代前期末葉～中期初頭に比定される土器群

TP1の6層、1トレの3・5層に出土した五領ヶ台式に比定される一群

3群　縄文時代中期後半に比定される土器群

G区表面採集資料、2トレ5層に出土した加曽利E式に比定される一群

4群　縄文時代晩期末葉に比定される土器群

TP1の1号土坑、1トレ4層、2号土坑などで僅かに出土した東北地方の大洞式系土器、氷式、千網式の影響下にあるとみられる細密条痕が施文された一群

5群　弥生時代初期に比定される土器群

TP1の1号土坑、1・2トレ3～4層などで出土した茎束条痕、また東海条痕文系土器の影響と思われる条痕原体が二枚貝腹縁である貝殻条痕によって施文された土器を主体とする一群

6群　弥生前期末葉～中期初頭に比定される土器群

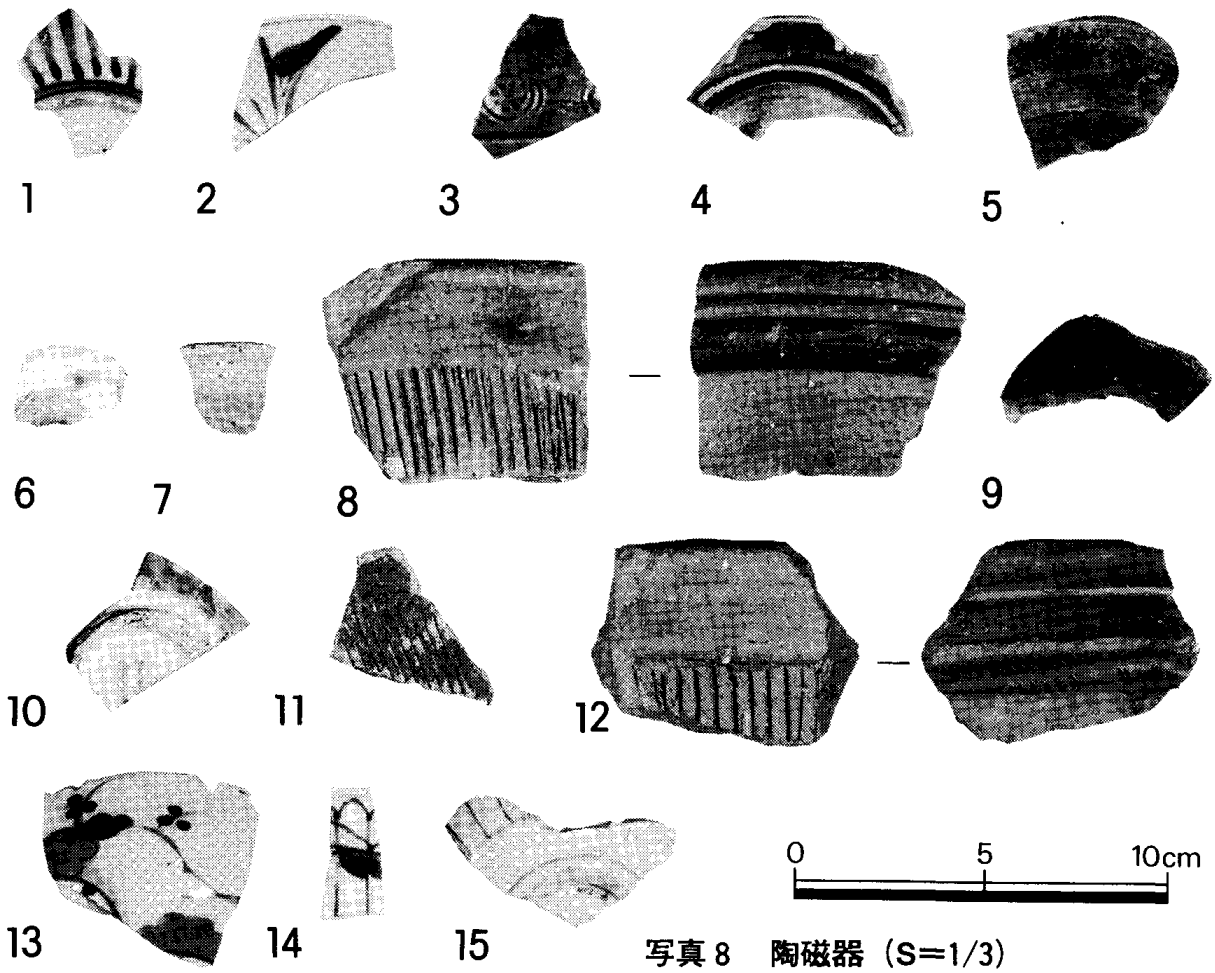


写真 8　陶磁器（S=1/3）

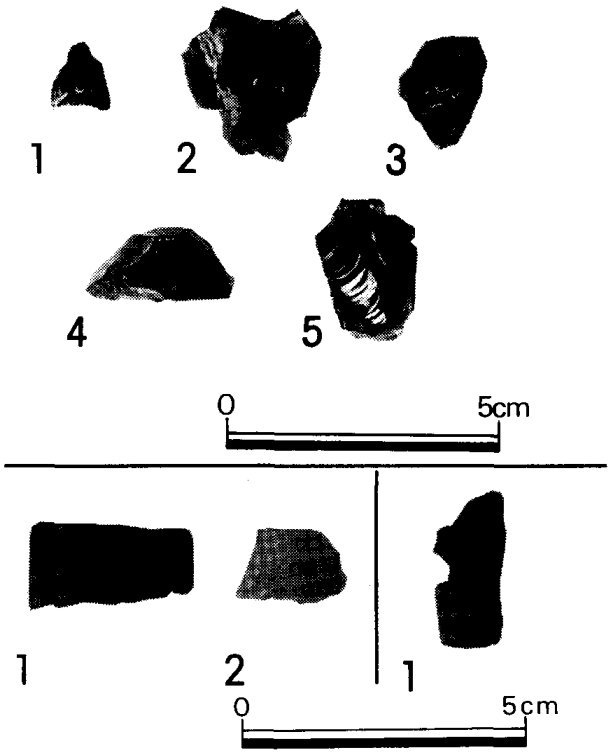


写真11 土製品(S=1/2)

写真10 石製品(S=1/2)

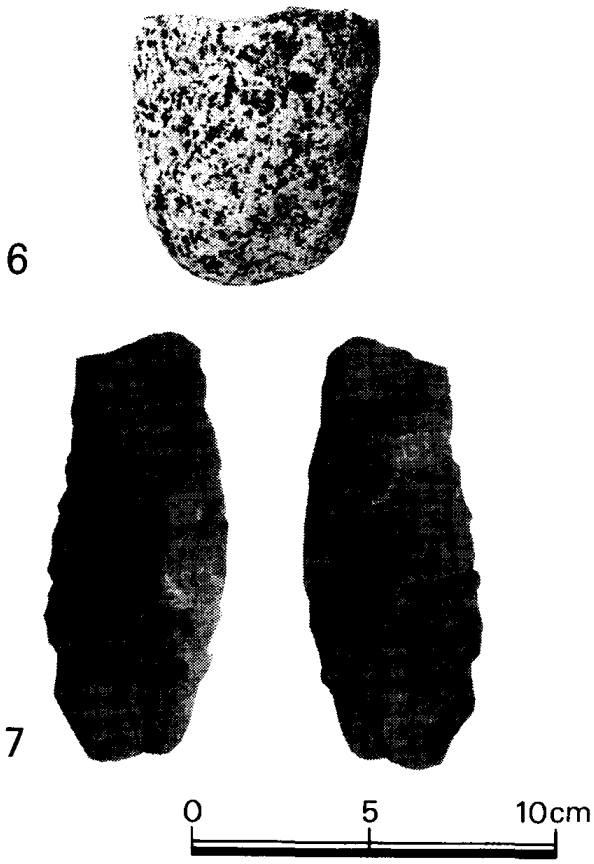


写真 9　石器(1～5 S=1/2、6･7 S=1/3)

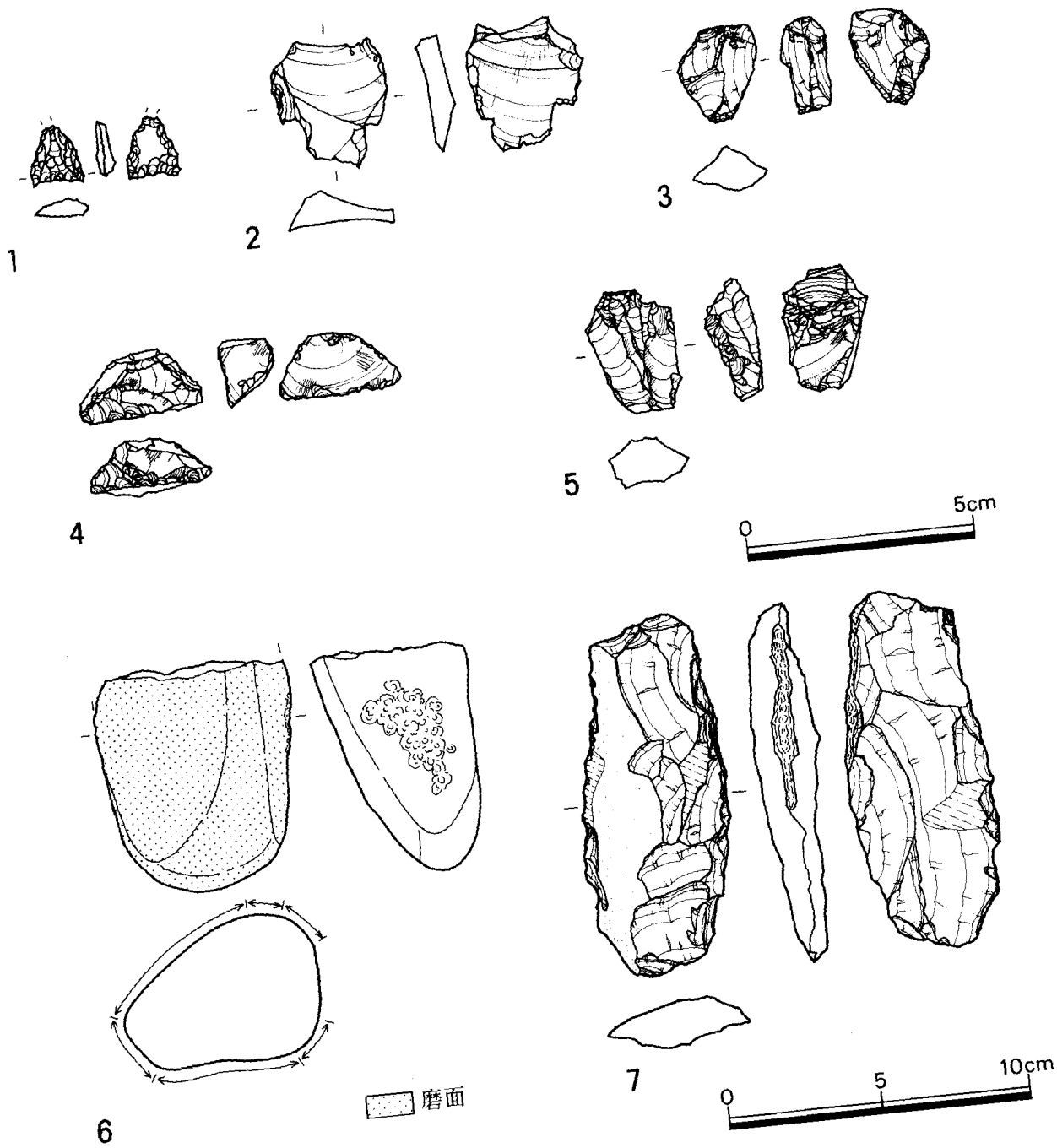


図9　石器（1～5 S=1/2、6・7 S=1/3）

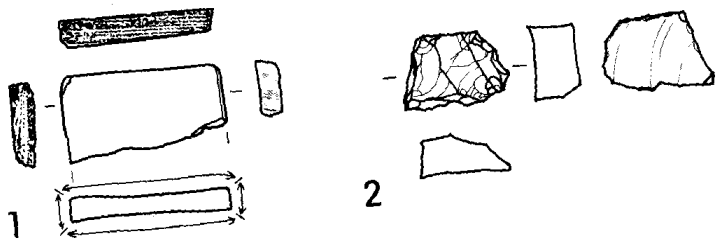


図10　石製品（S=1/2）

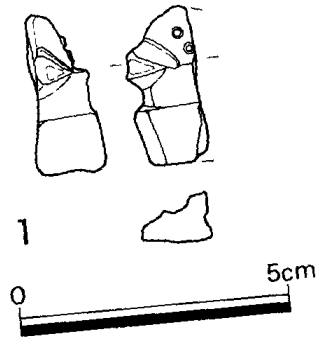


図11　土製品（S=1/2）

条の圏線、胴部外面は連子格子文と蝶文が染付されている。18世紀末から19世紀前半の製品である。

15　肥前系磁器の腰丸碗の底部破片である。胴部外面は連子格子文、見込みには円圏の中央に抽象文が染付されている。19世紀代の製品である。　（舘）

3　石器（図9、写真9）

石器は、TP5から2点、1トレから8点（内3号土坑から2点）、2トレから17点（内2号土坑から11点）、計28点の石器が出土した。また遺跡内で1点表面採集できた。全体の器種組成としては、石鏃2点、石鏃の未製品2点、楔形石器3点、加工痕ある剥片1点、剥片4点、砕片11点、石核2点、打製石斧1点、特殊磨石1点、台石1点である。その内、特徴的な器種をあげる。

1　小型の黒曜石製の石鏃で、先端部を欠損している。裏面に素材剥片の腹面が残されており、素材剥片を縦位に用いていることが確認できる。二次加工は、まず正面に対して行われた後、裏面に対して連続して微細加工が行われている。残存長1.3cm、幅1.2cm、厚さ0.4cm、重量0.5g。2トレ5層出土。

2　黒曜石製の加工痕のある剥片である。末端寄りに、かなり風化の進んだ剥離面を残しており、先端先細りの縦長剥片を用いたものと考えられる。左右両辺にやや粗い二次加工が認められ、打面部は折断加工によって残されていない。なお、本資料の内部には被熱によるものと思われる痕跡が残されている。長さ2.8cm、幅2.5cm、厚さ0.8cm、重量5.1g。1トレ3号土坑内出土。

3　黒曜石製の楔形石器である。上下両端からの剥離痕が観察され、両極技法が用いられた結果と考えられる。長さ、幅2.3cm、厚さ1.1cm、重量2.5g。1トレ6層出土。

4　黒曜石製の楔形石器である。原礫面を打面として剥離された横長剥片が素材として用いられている。素材剥片の末端辺に両極技法によって形成された剥離痕が全体に認められる。長さ1.5cm、幅2.6cm、厚さ1.2cm、重量3.9g。2トレ1層出土。

5　黒曜石製の石核を転用した楔形石器と考えられる。裏面上位に石核時の打面が残されている。上下両端には微細剥離痕並びに潰れが認められる。長さ2.6cm、幅2.0cm、厚さ1.1cm、重量4.4g。2トレ1層出土。

6　石英閃緑岩製の特殊磨石である。横断面形状はほぼ三角形を呈しており、全面に磨痕が観察される。さらに、右側面には敲打痕が認められる。長さ7.5cm、幅6.5cm、厚さ5.1cm、重量330.0g。2トレ8層出土。

7　短冊形を呈する硬質細粒凝灰岩粒製の打製石斧である。大型の横長剥片を素材とし、粗い二次加工が施され、器面に原礫面を残す。側縁部は調整剥離の後に敲打調整を行って形状を整えている。長さ11.8cm、幅4.7cm、厚さ2.2cm、

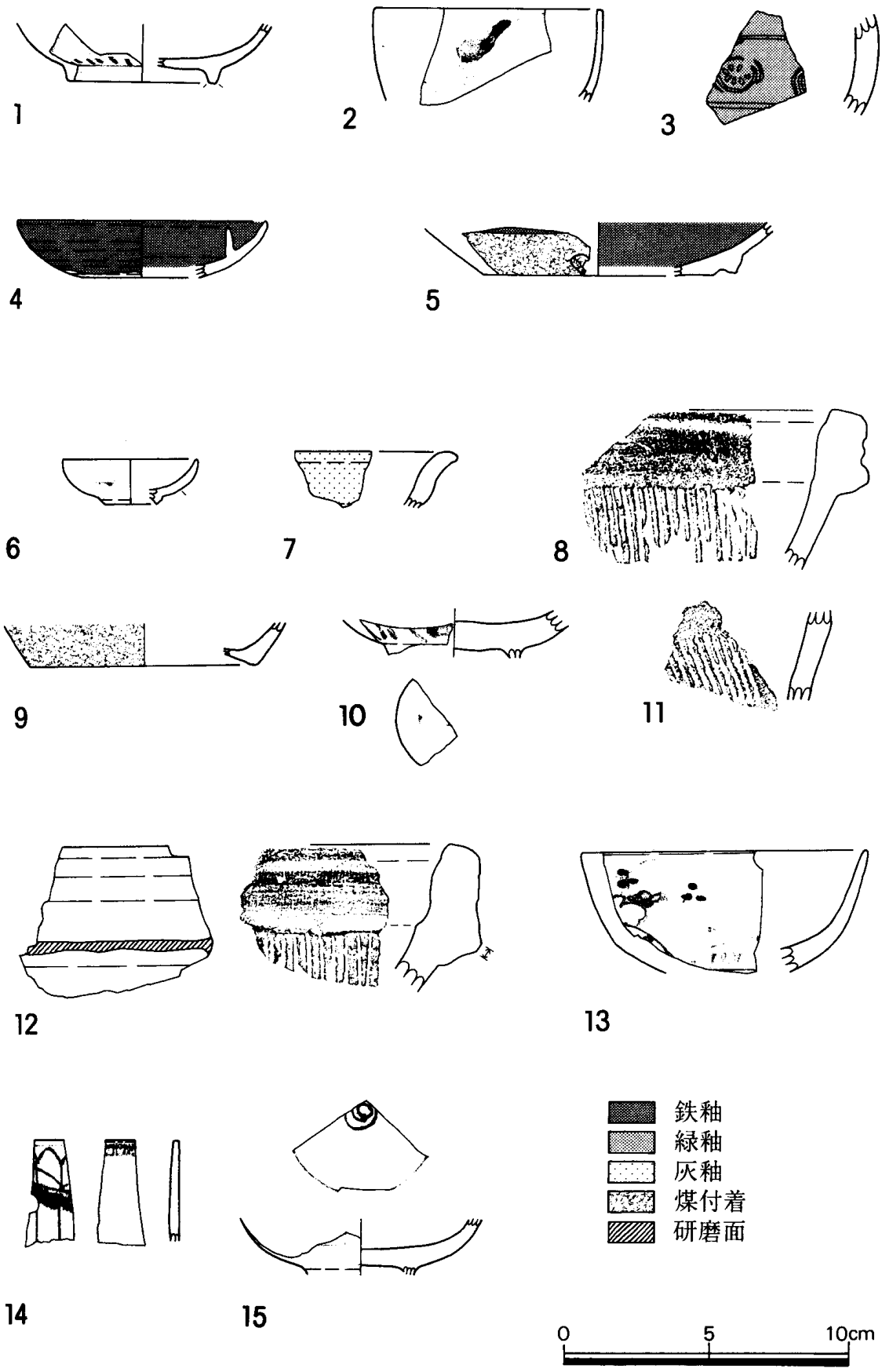


図8　陶磁器（S=1/3）

－１層出土。

2　肥前系磁器の碗の口縁部破片である。口縁部外面は１条、口縁部内面は２条の圏線、胴部外面は草花文が染付されている。口径8.1cm、残存高3.4cm。18世紀末から19世紀前半の製品である。TP５－１層出土。

3～６は１トレから出土した陶磁器である。

3　瀬戸・美濃系陶器の火鉢の胴部破片である。外面は文様が型押され、緑釉が施されている。内面は鉄錆が塗布されている。19世紀前半から中頃の製品である。ｂ区１層出土。

4　瀬戸・美濃系陶器の灯明受皿である。全面に鉄釉を施した後、体部外面を拭き取っている。外面は口縁部近くまで回転ヘラケズリが施されている。口径8.9cm、底径4.0cm、器高2.1cm。19世紀前半から中頃の製品である。ｂ区１層出土。

5　鉄釉土瓶の底部破片である。底部外面には三足が付き、ススが付着している。底径8.0cm、残存高1.9cm。19世紀以降の製品である。ｂ区１層出土。

6　瀬戸・美濃系磁器の紅猪口である。外面は染付され、胴部下半から高台にかけては無釉である。口径4.8cm、底径1.8cm、器高1.6cm。19世紀以降の製品である。ｂ区１層出土。

7～10は２トレから出土した陶磁器である。

7　瀬戸・美濃系の灰釉稜皿の口縁部破片で、17世紀後半の製品である。ｂ区１層出土。

8　明石・堺系の焼締擂鉢の口縁部破片である。口縁部内面に１条の沈線、外面に２条の沈線を巡らしている。18世紀後半から19世紀前半の製品である。ｃ区１層出土。

9　土瓶の底部破片である。底部外面にはススが付着している。底径8.0cm、残存高1.5cm。19世紀以降の製品である。１層出土。

10　肥前系磁器の丸碗の底部破片である。底裏には抽象文、高台外面は圏線、胴部外面は草花文と思われる文様が染付されている。18世紀代の製品である。ａ区１層出土。

11～15はＣ区表面採集資料である。

11　瀬戸・美濃系擂鉢の胴部上半破片である。内外面ともに鉄釉が施されている。

12　明石・堺系の焼締擂鉢の口縁部破片である。口縁部内面に１条の沈線、外面に２条の沈線を巡らしている。突帯が研磨されており、砥石に転用されたと思われる。18世紀後半から19世紀前半の製品である。

13　「くらわんか手」と称される肥前系磁器の丸碗である。胴部外面は雪輪草花文が染付されている。器壁が厚いこの碗は長崎県波佐見地方を中心に量産された雑器である。口径10.1cm、残存高4.4cm。18世紀代の製品である。

14　肥前系磁器の筒形碗の口縁部破片である。口縁部外面は１条、口縁部内面は２

1　深鉢形土器の胴部破片である。横方向の沈線で区画した後、破片上部には交互刺突、また下部には縦方向の細い条線が施文される。胎土はやや粗く、角閃石を含む。縄文時代中期後半に比定される。G区採集。G地区では同時期の土器を他に2点採集した。

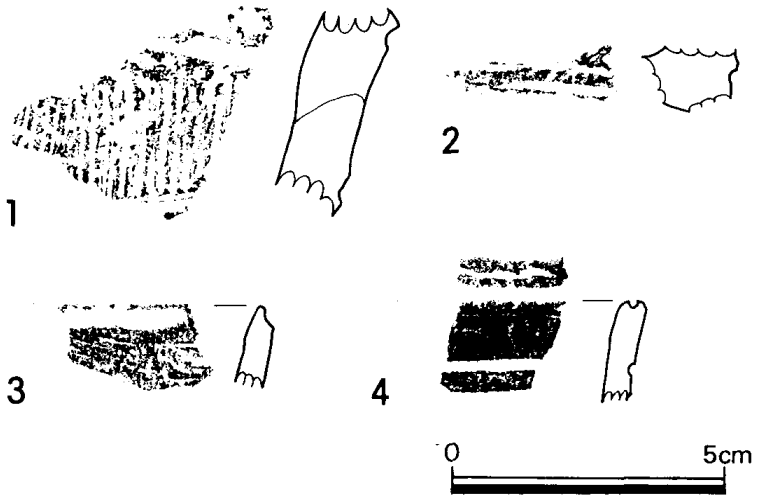


図7　中屋敷遺跡内表面採集土器（S=1/2）

2　台付鉢形土器の接合部破片である。外面横方向に平行する2本の沈線が施文される。胎土はやや粗く、角閃石・凝灰岩粒を含む。縄文時代晩期末葉に比定される。G区採集。

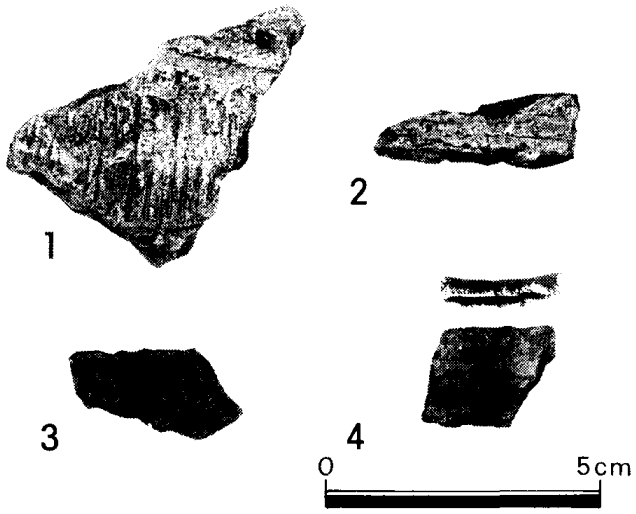


写真7　中屋敷遺跡内表面採集土器（S=1/2）

3　口縁部破片である。器種不明。口縁端が口外帯状に面取りされている。内外面は横方向のケズリ、もしくは強いヘラミガキ。胎土はやや緻密で、石英・角閃石を含む。弥生時代初期に比定される。G区採集。

4　鉢形土器の口縁部破片である。頸部に横方向の沈線を施す。口縁端面に連続する細く深い沈線を施す。内外面はミガキ。胎土はやや緻密で、（金）雲母を含む。弥生時代初期に比定される。F区採集。　（佐々木）

2　陶磁器（図8、写真8）

陶磁器は、TP4から1点、TP5から3点、1トレから59点、2トレから30点、計93点出土した。また遺跡内で29点表面採集できた。器種組成としては、碗、皿、鉢、土瓶、瓶、燗徳利、擂鉢、灯明皿、紅猪口、油壷、火鉢が認められる。その内、特徴的なものを調査区ごとに示す。

1　肥前系磁器の油壷の底部破片である。高台外面には圏線、胴部下半は縦縞が染付されている。底径5.1cm、残存高2.2cm。19世紀前半の製品である。TP4

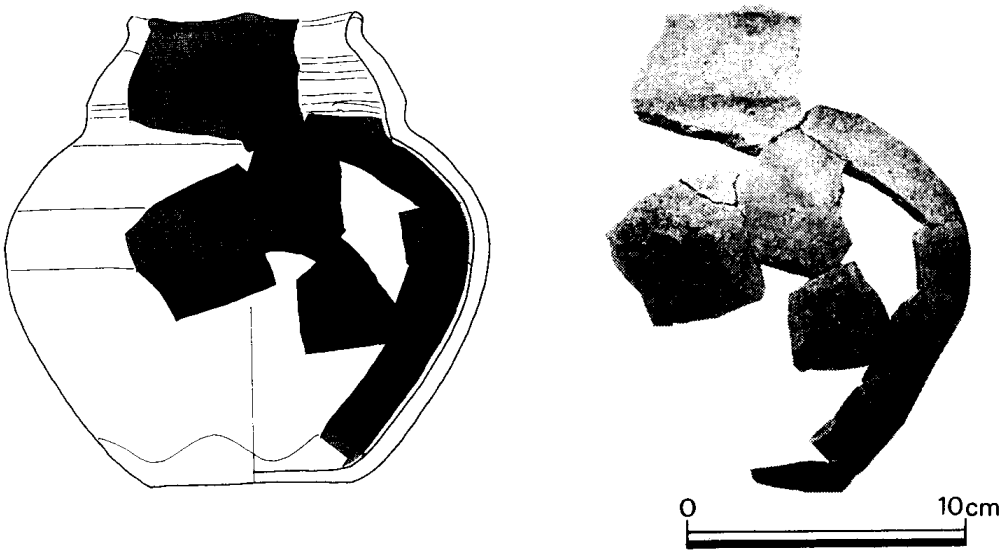
横方向で不揃いなやや深めの茎束条痕が施文され（6ｂ・6ｃ）、下半部にいくほど縦方向になっている（6ｄ）。内面は横方向のヘラナデ。胎土はやや緻密で、石英・（金）雲母が含まれる。②－２・４層出土。

7　甕形土器の胴部破片である。破片上部は右下がりに不揃いで浅い茎束条痕を施した後、下部に縦方向の不揃いな条痕を施す。内面はナデ。胎土は粗く、石英・角閃石・凝灰岩粒を含む。②－４層出土。

8　甕形土器の胴部破片である。縦方向に近い右下がりの不揃いな茎束条痕が施文される。内面は縦方向のナデ。部分的にススが付着する。胎土は粗く、石英・凝灰岩粒を含む。２号土坑一括出土。

9　甕形土器の胴部破片である。縦方向の不揃いな茎束条痕が施文される。内面は縦方向のナデ。胎土は非常に粗く、石英・（金）雲母を含む。内面は部分的にススがわずかに付着する。②－２・５層出土。

10　ゆるやかな山形突起をもつ壺形土器である。頸部が肥大し、内湾する。山形突起の推定単位は６単位である。内外面及び底面はケズリの後ナデ。口径8.2cm、胴部の最大幅17.0cm、底径7.6cm、器高17.2cm。内外面、底面は黒色処理される。焼成後、赤彩で頸部には横長楕円形の枠状に抜いた形で横位に連続する文様を、胴部には帯状、底面近くには波状に描かれる。縁端面と底面にも赤彩される。内面は横方向のナデ。外内面に部分的にススが付着する。胎土は緻密で、石英・（金）雲母を含む。②－２層および②－２層上部出土。



図・写真６　第２トレンチ２号土坑出土No.10土器（Ｓ＝1/4）

［表面採集土器］（図７、写真７）

調査期間中にＡ・Ｃ・Ｆ・Ｇ区において縄文時代から弥生時代初期に比定される土器が、合計25点採集された。大半が弥生初期に比定される条痕文土器である。表面採集された土器のうち、特徴的なものを掲げる。

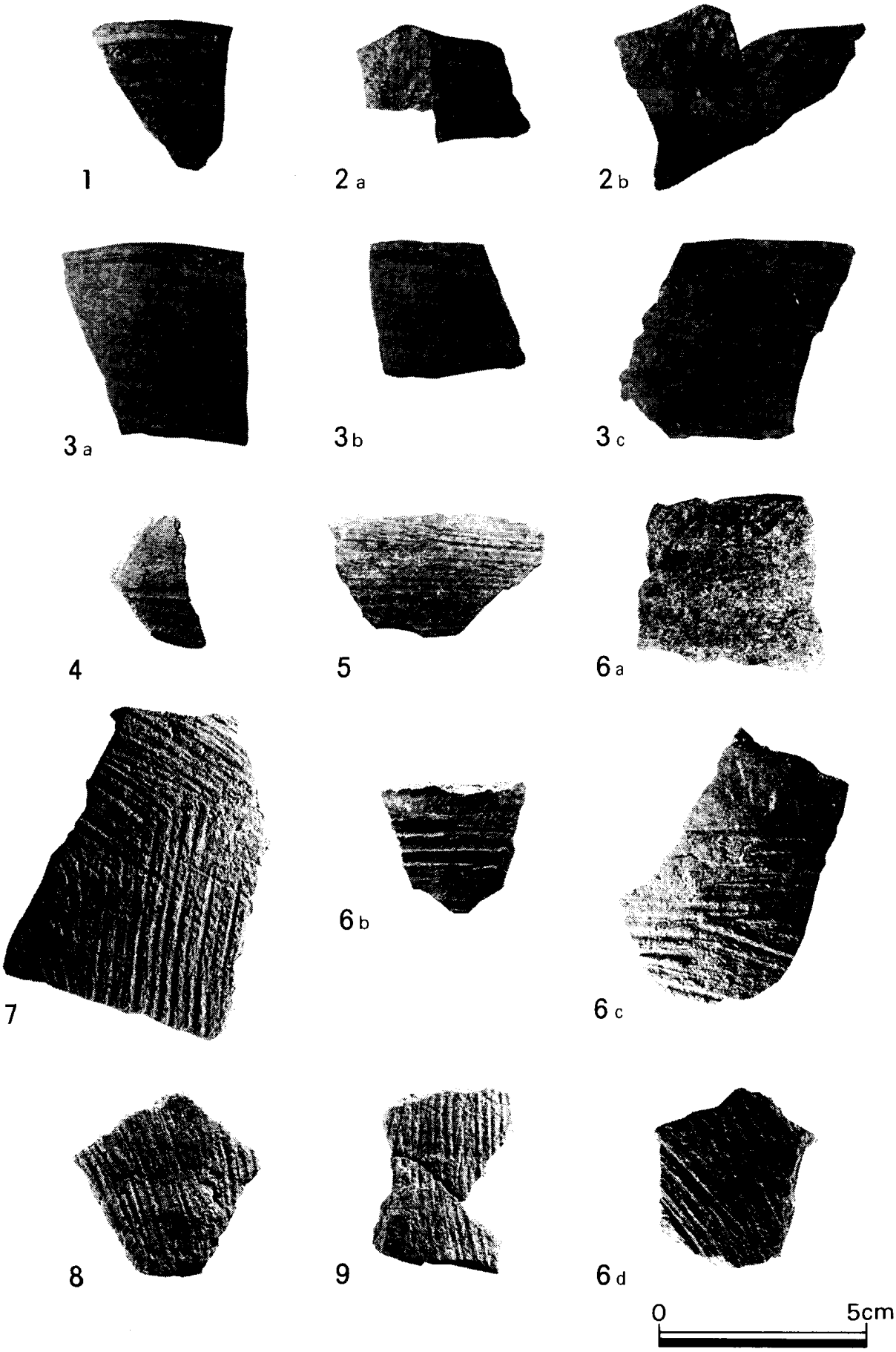


写真5　第2トレンチ2号土坑出土土器（S=1/2）

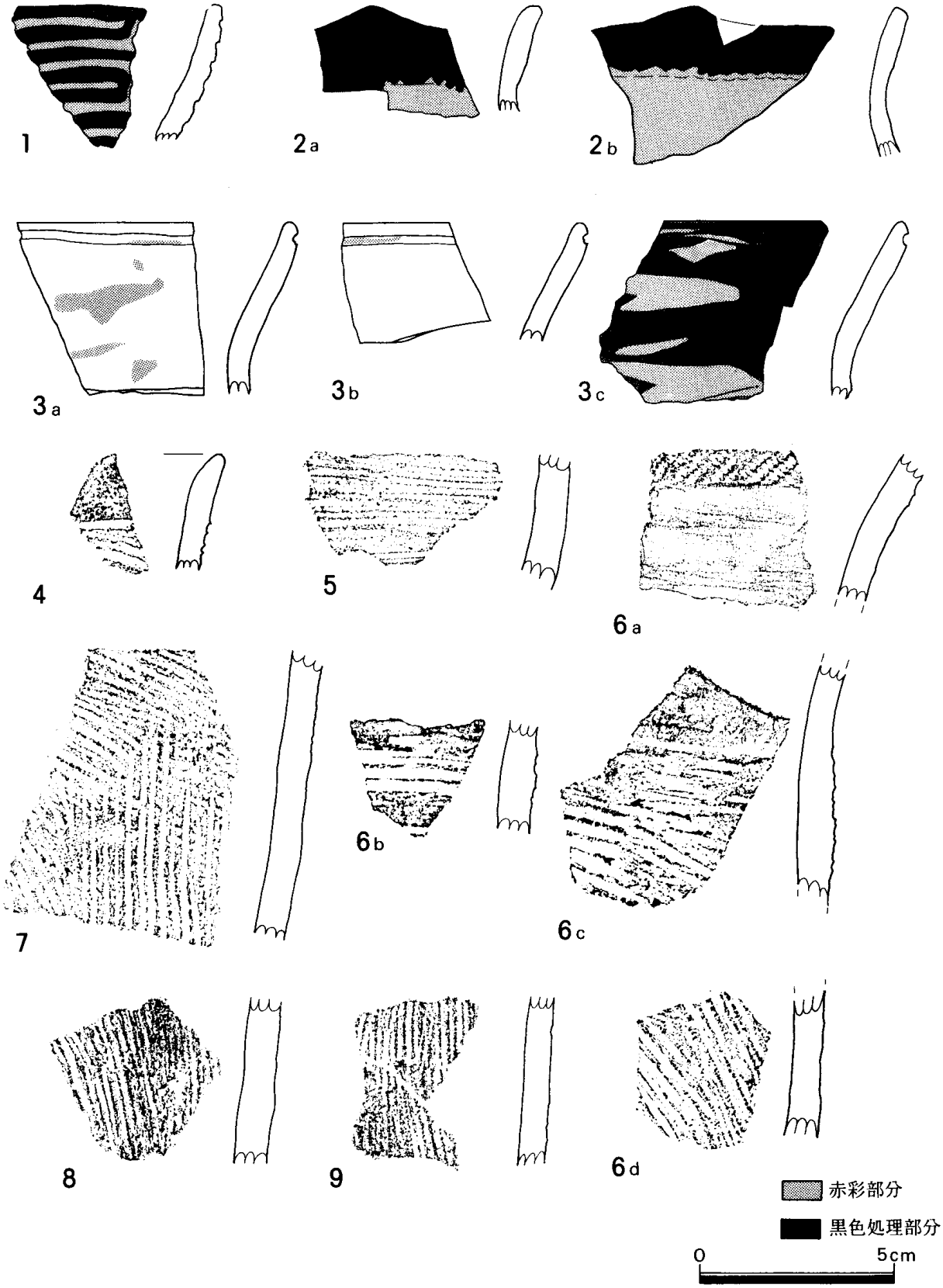


図5　第2トレンチ2号土坑出土土器（S=1/2）

13　甕形土器の胴部破片である。半截竹管状の工具によって縦方向に深い条痕が施文される。内面はナデ。推定底径5.8cm。胎土は緻密で、石英・(金) 雲母を含む。弥生時代初期に比定される。c区1層出土。

14　甕形土器の底部付近の破片である。やや底部付近が突出する。外面2単位で半截竹管状の工具による縦方向に深く不揃いな条痕、下部は横方向のナデ。内面は横方向のナデ。胎土は粗く、角閃石・凝灰岩粒を含む。弥生時代初期に比定される。a区5層出土であるが、レヴェル的には他の弥生時代初期の土器が出土する位置のため、a区においても部分的に3層が残存していた可能性があり、3層出土とするのが妥当であろう。

[2トレ2号土坑出土土器]（図5・6、写真5・6）

2トレ内の出土遺構、2号土坑出土土器（47点）の中で特徴的なものを掲げる。1以外はすべて弥生時代初期に比定される。

1　浅鉢の口縁部破片である。隆起線文で浮線網状文風の文様を描く。隆起線文自体には平坦面が残る。内外面は入念なヘラミガキ。外面は黒色処理後、焼成後の全面赤彩が施されると思われるが、現状では沈線内部のみ赤彩痕が残存する。胎土は緻密で、角閃石・石英を含む。縄文時代晩期最終末から弥生時代初頭に比定される大洞系の資料である。②－2層上部出土。

2　広口壺の口縁～頸部破片である。ゆるやかな山形突起を呈し、口縁端は帯状になる。口縁部付近は節の細かいLR縄文が施文され、頸部は横方向のナデ。内面および口縁端面は横方向のヘラミガキ。黒色処理される。焼成後、頸部と口縁端面に赤彩を施したと思われる。胎土は緻密で、石英を含む。②－2層および②－2層上部出土。

3a～c　広口壺の口縁部破片である。口縁部付近と頸部の括れ部に横方向の細めの沈線が施文される。内外面ヘラミガキ。残存状況は悪いが、焼成後外面に赤彩されている。現状では土器の凹部分のみに赤彩が残存しているが、本来は黒色処理後、外面全体を赤彩されていたと思われる。胎土は緻密で、石英・(金) 雲母を含む。②－2層および②－2層上部出土。

4　鉢形土器の口縁部破片であると思われる。外面横方向の沈線の下に浅い沈線でモチーフ不明の文様が描かれる。内面はヘラナデ。胎土はやや緻密で、凝灰岩粒・角閃石・(金) 雲母が含まれる。②－2層出土。

5　甕形土器の胴部破片である。やや右下がりの細い茎束条痕が施文される。内面は横方向のナデ。胎土はやや粗く、石英・凝灰岩粒を含む。②－2層出土。

6a～d　同一個体の甕の頸部～胴下半部破片である。掲載した破片の他、同一個体破片が3点出土した。口縁端部近くに節のやや太いLR縄文が帯状に施文され、頸部は横方向のヘラナデである（6a）。胴部の最大径部分から下部に、

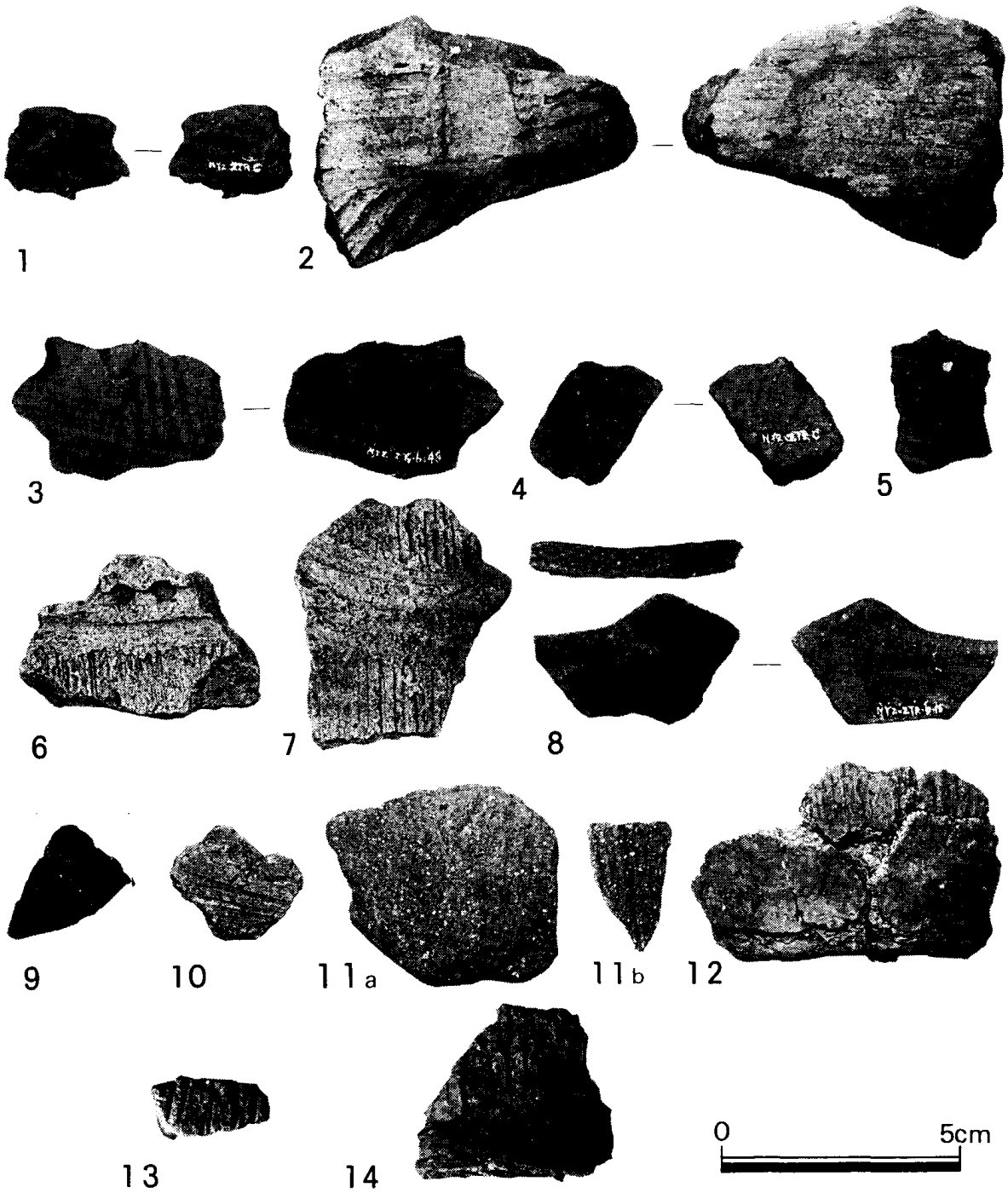


写真4　第2トレンチ包含層出土土器（S=1/2）

11a・11b　甕形土器の胴下半部破片である。同一個体。縦方向に粗く不揃いな茎束条痕が施文される。表面はやや摩滅している。内面はナデ。胎土は非常に粗く、石英を多く、（金）雲母・凝灰岩粒を含む。弥生時代初期に比定される。c区3層出土。

12　甕形土器の底部付近の破片である。1次調整は横方向のナデと思われる。上部に縦方向の粗く不揃いな茎束条痕が施文され、下部はナデのままになっている。内面はナデ。復元による推定底径は5.8cm。胎土は粗く、角閃石・凝灰岩粒が含まれる。弥生初期に比定される。c区3層出土。

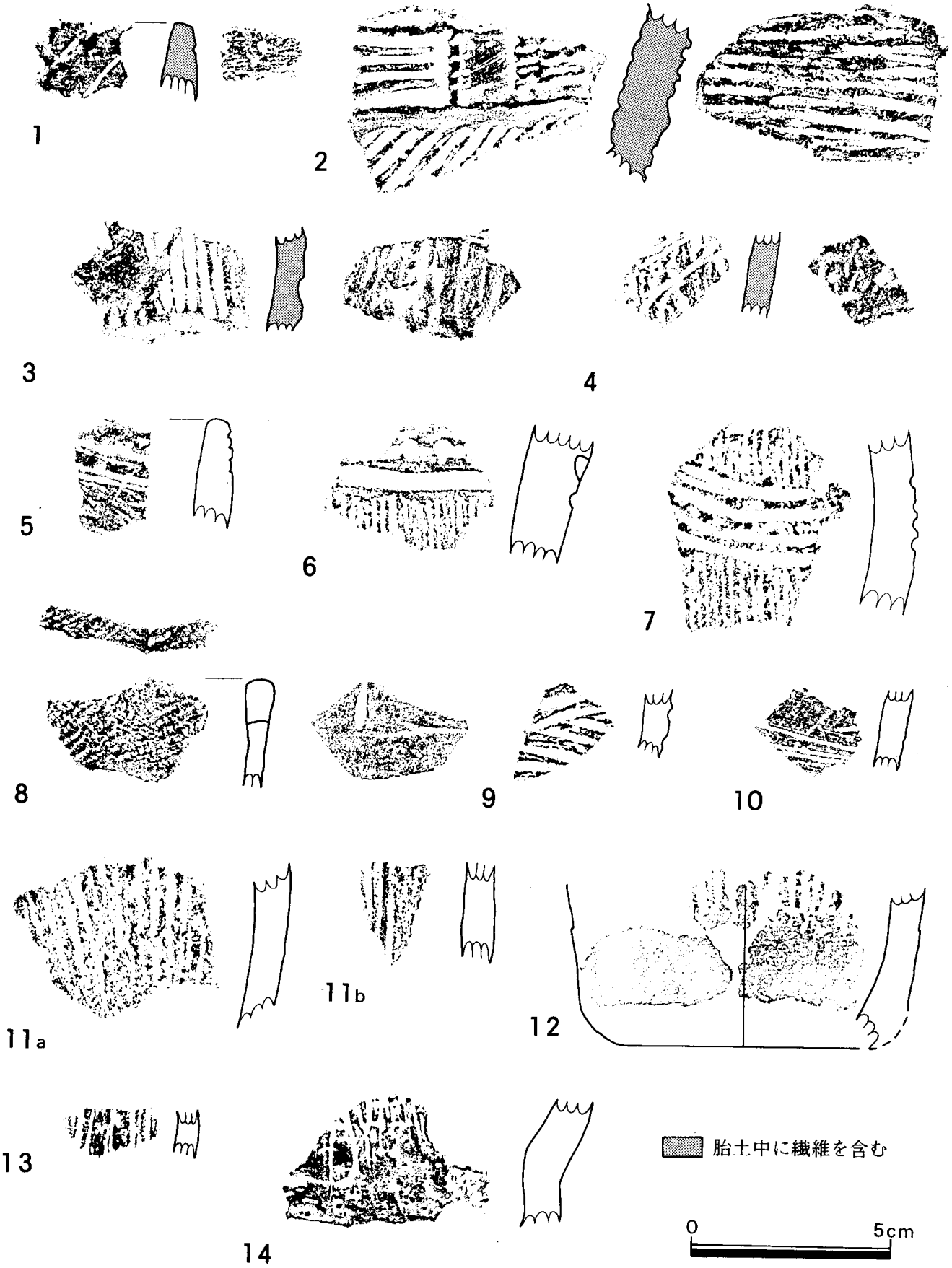


図4　第2トレンチ包含層出土土器（S=1/2）

2トレ包含層出土土器（37点）の中で、特徴的なものを掲げる。1～4は縄文時代早期後半、5は前期後半、6・7は中期後半、8～14は弥生時代初期に比定される。

1　深鉢形土器の口縁部破片である。横方向の細かい擦痕が施文された後、左下がりの細い沈線が施文される。内面は横方向に擦痕が施文される。胎土中に繊維を含む。野島式に比定される。c区1層出土。

2　深鉢形土器の胴部破片である。細隆起線による縦横の区画の内部を横方向の沈線により充填し、細隆起線上には刻みが施される。胴部には左下がりの沈線が施文される。内面は横方向の条痕が施文される。胎土中に繊維・石英を含む。野島式に比定される。a区5層出土。

3　深鉢形土器の胴部破片である。細隆起線によって区画され、その内部を縦方向の沈線で密に充填している。区画文の交点に刻みが施される。下端部に屈曲が認められる。内面は縦方向に浅い条痕が施文される。胎土中に繊維を含む。野島式に比定される。b区6層出土。

4　深鉢形土器の胴部破片である。右下がりに条痕を施した後、左下がりに半截竹管を用いた細い沈線が施文される。内面に浅い条痕が施文される。胎土中に繊維が含まれる。縄文時代早期後半に比定される。c区1層出土。

5　深鉢形土器の口縁部破片である。やや波状の口縁を呈す。半截竹管によって右下がり方向に施文される。胎土はやや緻密で、白色粒子・石英を含む。諸磯b～c式に比定される。b区1層出土。

6　深鉢形土器の胴部破片である。太くゆるやかな弧状の沈線による区画の後、破片上部は横方向の交互刺突、下部に縦方向の条線が施文される。胎土は粗く、石英・角閃石が含まれる。加曽利E式に比定される。b区5層出土。

7　深鉢形土器の胴部破片である。縦方向に細かい条線が施文された後、4条の沈線が弧状に描かれる。胎土は粗く、石英・角閃石が含まれる。加曽利E式に比定される。b区1層出土。

8　壺形土器の口縁部破片である。山形突起を呈する口縁部および口縁端面に節の細かいLR縄文が施文される。頸部は横方向のナデ。突起部の内面に縦方向の短い沈線が加えられる。内面は横方向のナデ。胎土はやや緻密で、石英・雲母が含まれる。弥生時代初期に比定される。b区3層出土。

9　壺形土器の胴部破片と思われる。沈線もしくは条痕原体によって綾杉状の文様が施文される。内面ナデ。胎土はやや粗く、石英・（金）雲母を含む。弥生時代初期に比定される。b区2層出土。

10　器種不明の胴部破片である。右下がりに不揃いな浅い条痕が施文される。内面はケズリの後、ナデ。胎土中はやや緻密で、石英が含まれる。弥生時代初期に比定される。c区1層出土。

みられ、網代痕の周囲が削られている。編み方は不明。復元した推定底径10.2cm。胎土は粗く、角閃石を多く、石英を含む。内面の底面近くにわずかに赤彩？された痕跡が残る。弥生時代初期に比定される。排土出土。

［1トレ3号土坑出土土器］（図3、写真3）

1トレ内の出土遺構、3号土坑出土土器（17点）の中で、特徴的なものを掲げる。

1　甕形土器の頸部破片と思われる。外面上部は横方向、下部は右下がりの貝殻条痕が施文される。内面はナデ。胎土はやや緻密で、石英・（金）雲母を含む。弥生時代初期に比定される。3号土坑覆土上層出土。

2　壺形土器の頸部破片である。無文であるが、下半部に条痕のはみだしのような右下がりの細い条痕の痕跡がみられる。外面にススが付着する。内面は工具による横方向の弱いミガキ。胎土はやや緻密で、石英・輝石を含む。弥生時代初期に比定される。3号土坑覆土下層出土。

3　甕形土器の胴部破片である。右下がりに粗く不揃いな条痕が施文される。内面は横方向のナデ。胎土はやや粗く、石英・（金）雲母を含む。弥生初期に比定される。3号土坑覆土上層出土。

4　壺形土器の口縁部破片である。ヘラ状の工具でレンズ状に押捺を加えた突帯文を貼り付けた後、縦方向に貝殻条痕文が羽状に施文される。内面は浅く太描きの沈線で工字文風の文様を描く。胎土はやや緻密で、石英・（金）雲母・角閃石を含む。弥生時代前期末～中期初頭に比定される。3号土坑覆土下層出土。

［2トレ包含層出土土器］（図4、写真4）

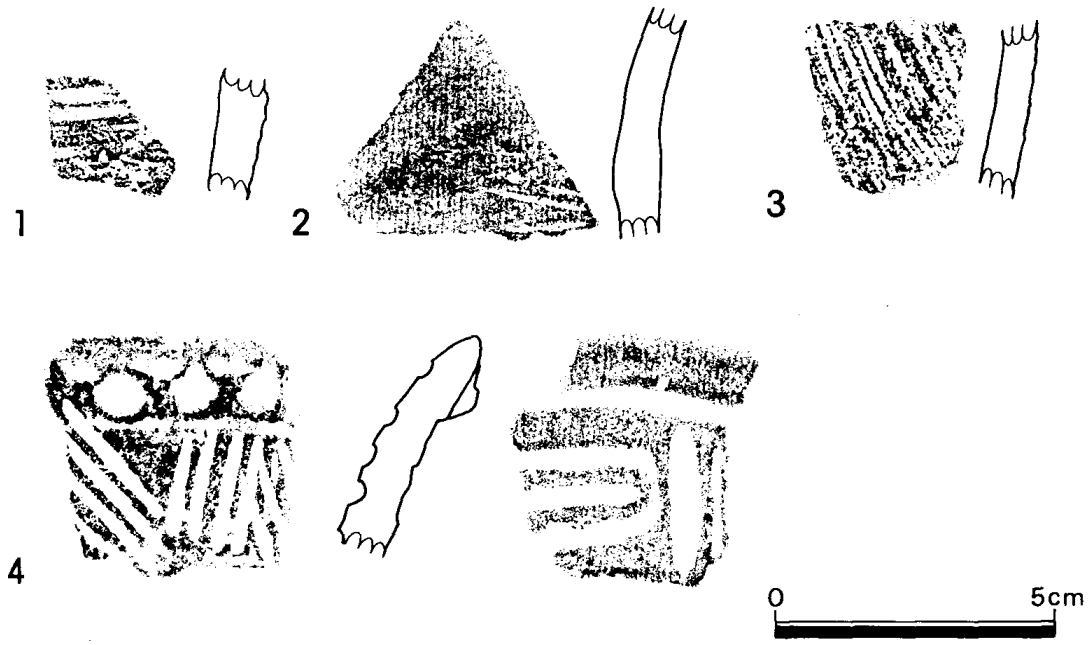


図3　第1トレンチ3号土坑出土土器（S＝1/2）

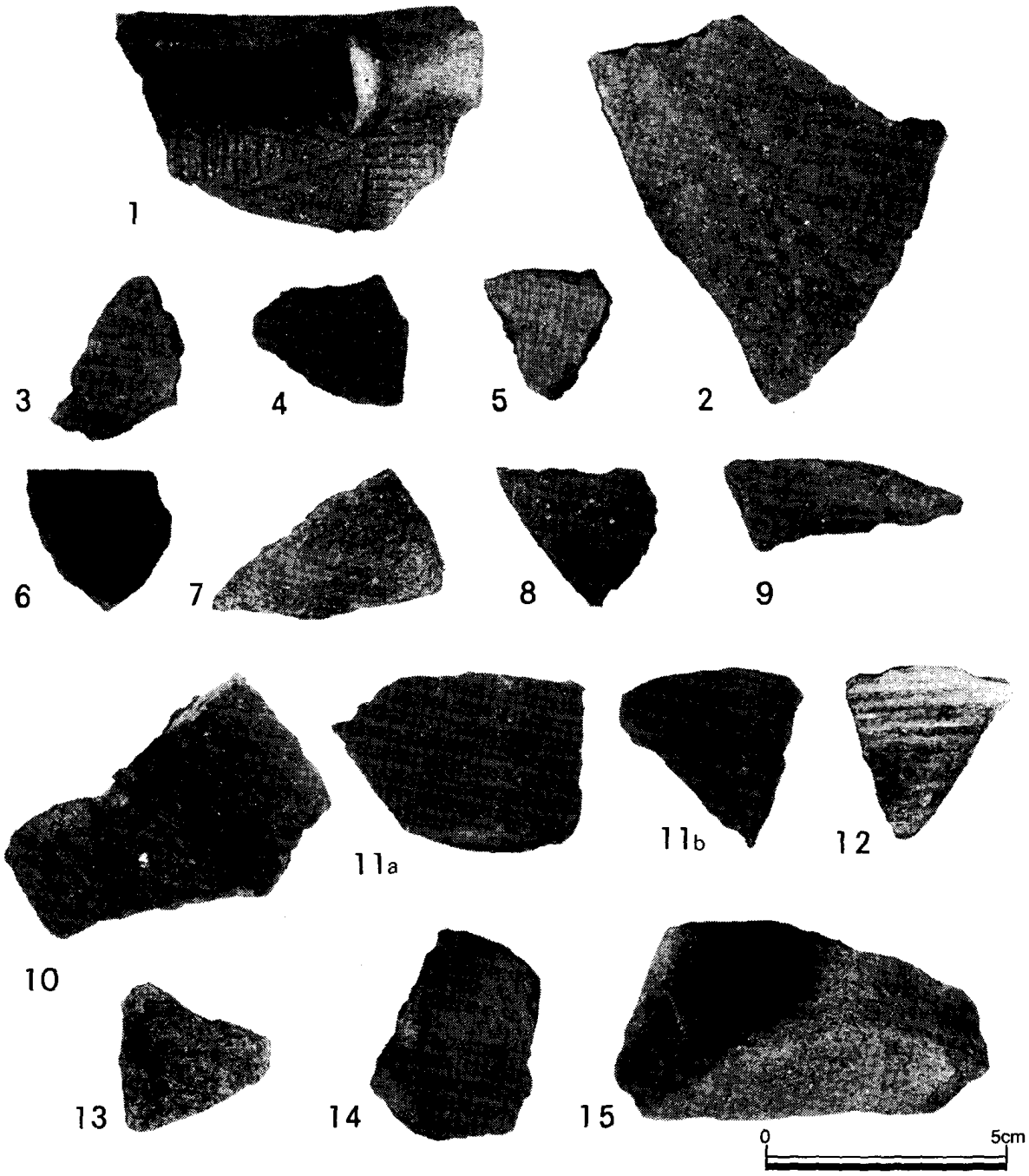


写真２　第１トレンチ包含層出土土器（S＝1/2）

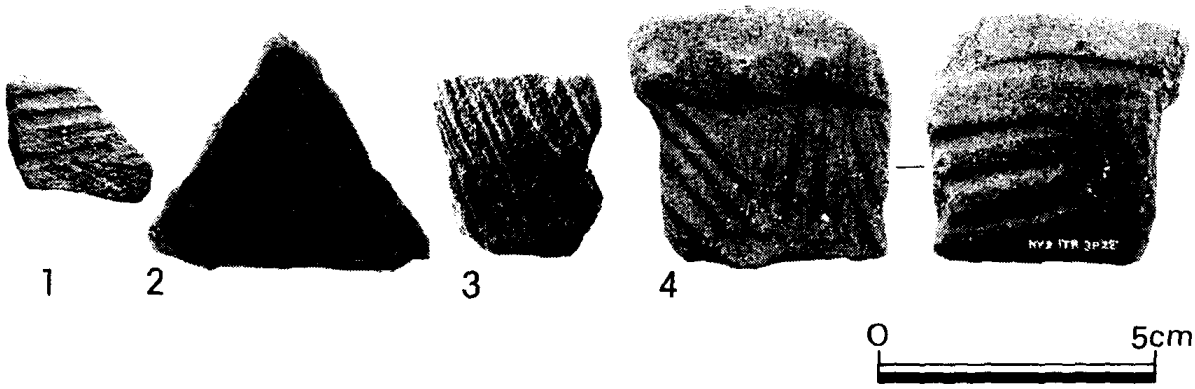


写真３　第１トレンチ３号土坑出土土器（S＝1/2）

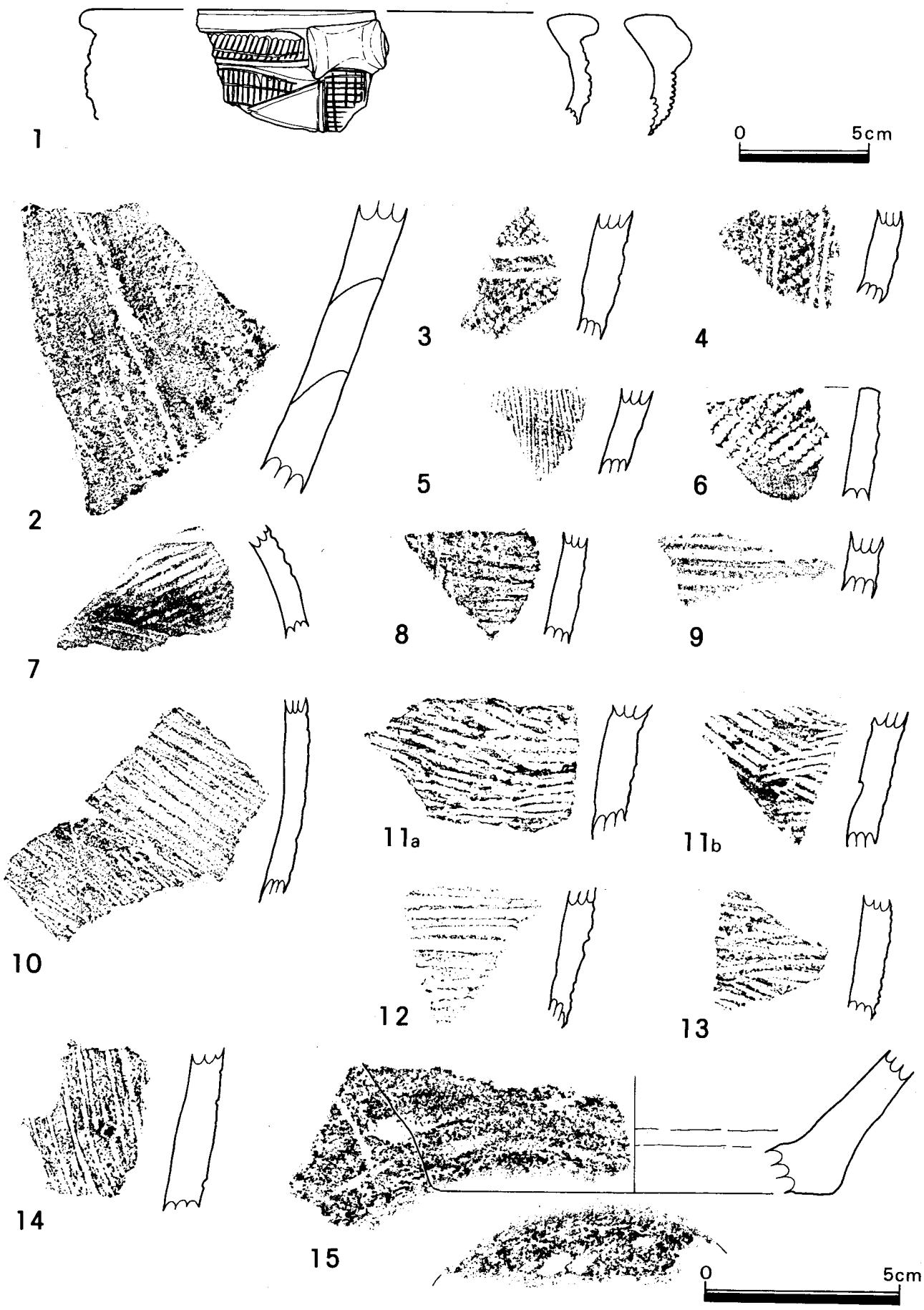


図2　第1トレンチ包含層出土土器（1 S=1/3、2～15 S=1/2）

2　深鉢形土器の胴部破片である。外面は無文で右下がり方向のケズリ。胎土は粗く石英、角閃石を多く含む。縄文時代に比定される。a区4層出土。

3・4　深鉢形土器の胴部破片である。節の太い単節ＬＲ斜縄文（以下ＬＲ縄文）を施文後、3は平行沈線が2本横方向に、4は半截竹管による沈線が縦方向に描かれる。胎土はやや緻密で、石英・(金) 雲母を含む。縄文時代前期末葉～中期初頭に比定される。a区3層出土。

5　甕もしくは深鉢形土器の胴部破片である。縦方向に植物の茎を束ねたような原体によるやや不揃いで細密な茎束条痕（以下茎束状の原体を用いて施文された条痕を茎束条痕と呼称する)[2]が施文される。内面はナデ。胎土はやや緻密で、小礫が含まれる。縄文晩期末葉から弥生時代初期に比定される。a区4層出土。

6　甕形土器の口縁部破片である。ゆるい山形突起を呈す。口縁部付近に節の太いＲＬ縄文が施文されるが、頸部は横方向のナデ。内面横方向のヘラナデ。内面にススが付着する。胎土は緻密で、石英・(金) 雲母を含む。弥生時代初期に比定される。b区4層出土。

7　広口壺形土器の胴部破片である。横方向の沈線の下に節の細かいＬＲ縄文が施文され、下部は横方向のミガキ。内面は横方向のケズリの後、ナデ。胎土はやや緻密で、石英・凝灰岩粒を含む。弥生時代初期に比定される。a区4層出土。

8・9・10　甕形土器の胴部破片である。8はやや右下がり、9は横方向、10は右下がりの貝殻条痕が施文される。内面は横方向のナデ。胎土は粗く、石英・(金) 雲母を含む。弥生時代初期に比定される。8はb区3－b層、9は3－a層、10は3層出土。

11a・11b　甕形土器の胴部破片である。同一個体破片でこの他に3点の資料が出土している。横方向に不揃いな茎束条痕が施文される。内面は横方向のヘラナデ。胎土はやや粗く、石英を多く、(金) 雲母・白色粒子を含む。弥生時代初期に比定される。b区3－b層出土。

12　甕形土器の胴部破片である。横方向に不揃いなやや太めの茎束条痕が施文される。内面はケズリのナデ。胎土はやや緻密で、石英・チャートを含む。弥生時代初期に比定される。a区4層出土。

13　甕形土器の胴部破片である。外面上部は横方向、下部は右下がりに不揃いな浅い茎束条痕が施文される。ススが付着する。内面は横方向のケズリの後ナデ。胎土中はやや粗く、白色粒子を含む。弥生時代初期に比定される。b区3－b層出土。

14　甕形土器の胴部破片である。右下がりに不揃いで浅い茎束条痕が施文される。内面は横方向のケズリの後、ナデ。胎土は粗く、石英・白色粒子を含む。弥生時代初期に比定される。a区3層出土。

15　甕形土器の底部破片である。外面無文でケズリ、内面はナデ。底面に網代痕が

られることから、特徴的な土器を調査地点・遺構ごとに示す。

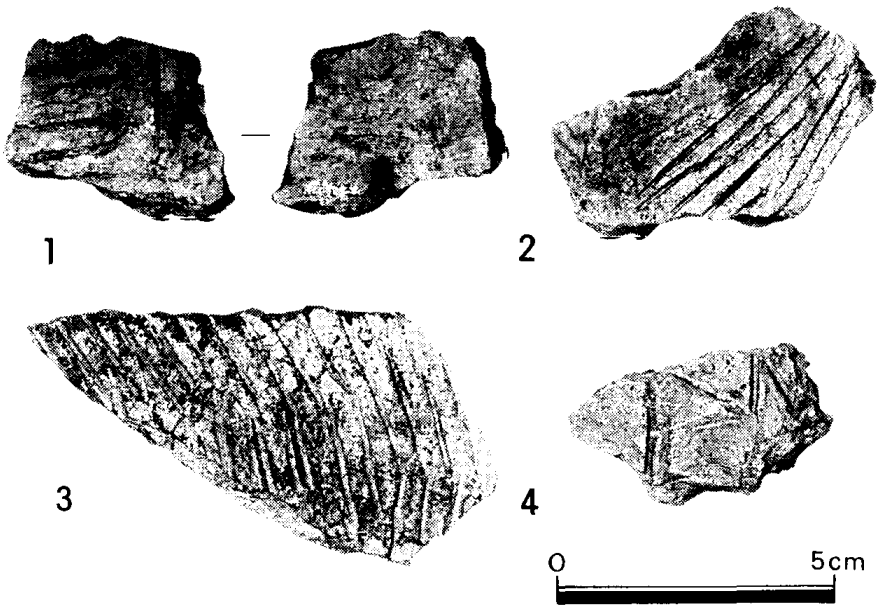


写真１　テストピット５出土土器（S=1/2）

[TP５]（図１、写真１）

TP５は上部の層がほとんど削平もしくは攪乱されている。縄文時代早期後半、前期後半に比定される土器が６点出土した。そのうち、特徴的なものを掲げる。

1　深鉢形土器の口縁部破片である。口縁端面には刻みが施されるが、縦区画沈線の右側の口唇上には刻みが認められない。文様は太めの沈線が縦横、斜位に入る。内面は横方向の浅い条痕文が施文される。胎土中に繊維を含む。野島式に比定される。７層出土。

2　深鉢形土器の胴部破片である。細隆起線により縦方向と斜め方向に区画し、その内部を細沈線により充填している。縦方向の細隆起線上には浅い刻みが施される。胎土中に繊維を含む。野島式に比定される。７層出土。

3　深鉢形土器の胴部破片である。半截竹管を用いた右下がりの粗い集合沈線が施文される。胎土はやや粗く、白色粒子・石英を多く含む。諸磯ｂ～ｃ式に比定される。７層出土。

4　深鉢形土器の胴部破片である。縦方向のナデの後、半截竹管により鋸歯状に沈線を描く。胎土はやや粗く、白色粒子を含む。諸磯ｂ～ｃ式に比定される。１層出土。

[１トレ包含層出土土器]（図２、写真２）

１トレ包含層出土土器（63点）の中で特徴的なものを掲げる。１～４は縄文時代、５～15は弥生時代初期に比定される。

1　平縁深鉢形土器の口縁部破片で、口縁部直下に鼓状の突起がつく。集合沈線文系土器である。三角状のケズリ取りによって、無文となっている。推定口径は20.0cmになる。胎土はやや緻密で、角閃石・石英・（金）雲母を多く含む。五領ヶ台Ⅰ式に比定される。ａ区５層出土。

調査報告

神奈川県足柄上郡大井町中屋敷遺跡第２次調査出土遺物報告

佐々木　由　香
舘　　まりこ

はじめに

本稿では、中屋敷遺跡第２次調査の出土遺物[1]（土器・陶磁器・石器・石製品・土製品）について報告する。調査の詳細については、別稿「神奈川県足柄上郡大井町中屋敷第２次発掘調査報告」をご覧いただきたい。なお、執筆分担については各項目の末に示した。

１　土器

第２次調査では、縄文時代早期後半、前期後半、前期末葉～中期初頭、中期後半、晩期末葉～弥生時代初期、弥生時代前期末葉～中期初頭に比定される土器が出土した。遺物の大半は、弥生時代初期に比定される条痕文系土器である。土器は一括で取り上げたものを含め、テストピット５（以下 TP５）、第１トレンチ（以下１トレ）、第２トレンチ（以下２トレ）から約200点の破片が出土した。また調査区内で表面採集した土器は25点である。出土した土器は調査地点ごとに時期的な傾向がみ

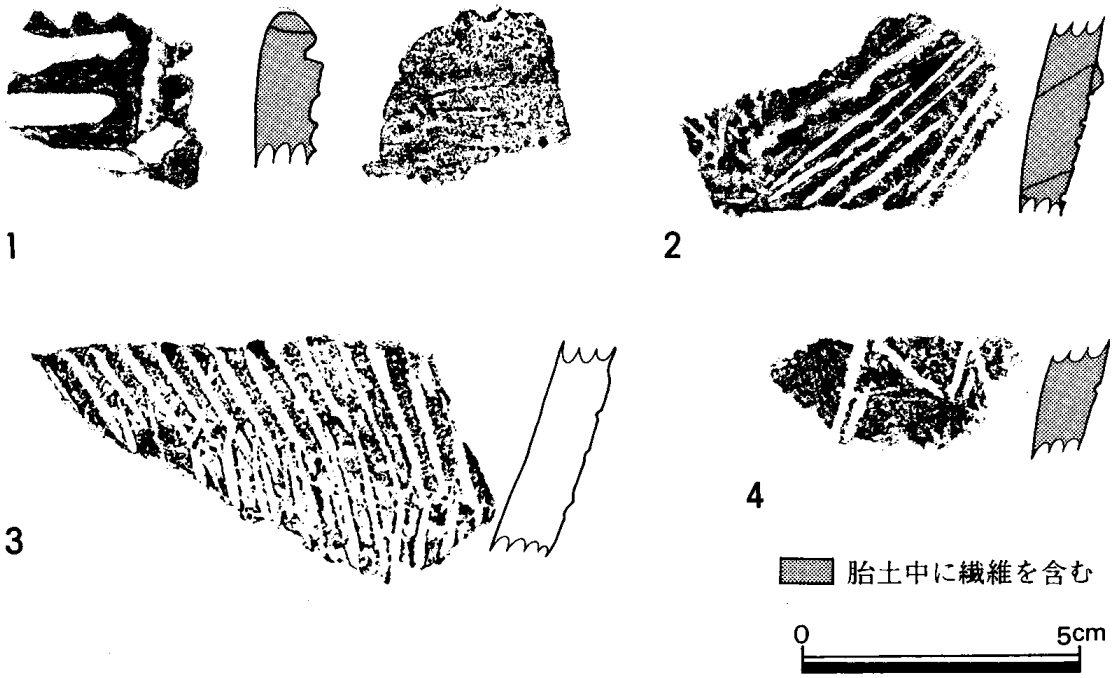


図１　テストピット５出土土器（S=1/2）